

Realities of Temple Fair in Wei Nan City

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46155

現在渭南市農村部における廟会の実態

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
博士後期課程3年

馬 涛 涛

要旨

中国における廟会に関する研究は多数あるが、中国の東北地方、華北地方、及び南部地方の廟会についての分析は多いものの、陝西省における関中地方の廟会に関する研究は非常に少ない。従って、本稿において現在、陝西省における民間芸術文化の一部である農村の廟会の実態を明らかにしたい。さらに、陝西省の農村部において、重大な年中行事及び、人々の人生の節目である通過儀礼に最も関連をしている物は新粉細工である。本稿は渭南市農村部の廟会の実態を分析したのち、その各要素による変化が廟会にどのように影響したかを指摘し、とりわけ新粉細工の役割及び、廟会の中の新粉細工の位置づけから考察の結果を提示する。

キーワード

廟会、新粉細工、変化

Realities of Temple Fair in Wei Nan City

MA Taotao

Abstract

Although there are many studies about Temple Fair in China, but a lot of analysis are about the Temple Fair in Dongbei area, Huabei area and southern area of China. The study about Temple Fair in rural areas of Shaanxi Province is not as much as it about other places. Therefore, in this paper, I want to clarify the actual situation of rural Temple Fair which is a part of people's private art and culture in Shaanxi Province. In addition, in rural areas of Shaanxi Province, Wheat Cake is the thing which is the most relevant to the rite of passage of people at events and serious year. This paper after analyzing the actual situation of the Temple Fair of WeiNan rural areas, pointed out whether the changes caused by each of its elements have affected to the Temple Fair. Especially this paper pointed out the results of the discussion about the role of the Wheat Cake and the position of Wheat Cake in Temple Fair.

Keyword

Temple Fair, Wheat Cake, actual situation

1. 廟会の定義と歴史的経緯

廟会とは、毎年、廟の縁日、或いは定められた

日に行う定期市である。中国では、廟会は民間生活の重要な行事であり、廟会文化は中国の伝統的な民間文化の一部である。中国では廟会に関する

研究は少なくない。

聞き取り調査の結果を基に、文献資料を参考とした上で、筆者は廟会についての研究は大まかに四つの段階に分かれると考えた。

第1段階は1920年から1930年の間、廟会の概念、廟会の歴史的機能、廟会と民間信仰の関係を基とした研究である。

第2段階は1930年から1980年にわたり、中国は戦争と文化大革命の時期にあたり、廟会は封建迷信の活動とみられ、廟会に関する研究も一旦中止せざるを得ない停滞の時期を迎えた。

第3段階とは、1980年から1990年の間である。この時期、中国は改革開放の方針により、寺、廟等の建物は再建されたり、廟会も復活する傾向が見られる。この状況とともに、廟会をめぐる研究も復活するようになった。

第4段階は1990年後期から現在に至る間である。政府の援助により、民俗文化を中心とした事業が展開され、民俗文化、伝統的な中国文化は新たに重視されるようになってきた。

それについては、廟会の概念、定義及び、歴史的発展に関する研究としては顧頡剛¹、張天虹²、劉鉄梁³、王作良⁴等の論文がある。

廟会文化に関する研究は高占祥⁵、趙世瑜⁶に廟会文化の概念が提示されている。他に、華北地方の廟会、南部地方の廟会を中心とし、廟会及び廟会文化を経済、組織、地方社会などの視点から分析した研究がある。その他、特色のある、地域性を持つ代表的な廟会を中心に分析し、廟会の類型及び民俗宗教の活動との関係を整える研究もある。

1-1 廟会の形成

「廟」の概念の確立は「廟会」の形成の過程と深く関わっている。廟は「黄帝⁷時期」に現れたが、人間の神霊に対する崇拝の意識は古代に遡ることができると認識される説がある。最初、佛教の寺院と道教の寺院は元々宗教活動の場所であった。しかし、法要、祭祀など宗教活動は娯楽活動、文化活動、経済活動と結合し、宗教活動が行われる場所は祭祀と関連する活動も行われるようになった。

た。このような宗教活動が進行する場所で行われる他の活動もまた「廟市」、或いは「廟会」と総称され、さらに、廟市か廟会で様々な主題を巡り活動が行われる現象は「廟会文化」と呼ばれるまでに発展してきた。

廟会の形成には長期的な期間を要した。後漢時代⁸、道教が盛んに行われたと同時に仏教が伝播され始めた。そのため、祭祀は頻繁に行われ、祭祀活動は盛んになっていった。祭祀活動の普及に伴い、宗教的活動は世俗化し、各種類の取引の進行及び、民間の交流により、祭祀をめぐる活動には娯楽の要素が強まってきた。春秋戦国時代⁹に、廟を中心の場所として、行われた経済活動は一定的な規模を持っていた。唐の時代になると、伝統的な廟会が少しずつ形を整え、宋の時代に一層発展した。明清時代から、廟会の形成は成熟した。さらに、廟会の中心は、最初の神霊を畏敬—崇拝—感謝—祀るための儀式から、神霊を祭祀、取引を行う、及び人と人の間の感情を交流するための社会活動になってきた。このような「祭祀」、「取引」、「感情の交流」という三つの要素を主にした廟会は伝統的な廟会であると考えている。現地調査により、現在でも中国の農村部に伝統的な廟会は普遍的に存在している。

ただし、そのうちの一つの要素を中心として、廟会を展開する場合もあると考えられる。例えば、河北省の「安国薬王廟会」は典型的な地域（省）を越え、製薬原料の貿易を中心活動とする廟会である。

廟会の概念に対する解釈は様々ある。調べることができる最初の廟会の定義は、1936年の『辞海』の「一定の日に、神社仏閣の場を取引の場所と借り、商売人が集まることを廟会という」¹⁰であった。1962年の『辞海』では、その解釈を新たに「廟会とはまた廟市とも呼び、中国の市の形式の一つ、唐時代にすでに存在し、寺や廟の行事の日に行われると定められる。一般には寺や廟の中、或いは近くで行われるため、廟会と呼ぶ。」¹¹と定義している。1990年以降、中国では廟会に関する研究調査は増加しつつあり、学者たちは廟会を文化的、

民俗的、経済的相違の角度から解釈した。そのうち、趙¹²は「廟会とはまた香会、廟市とも呼ばれる。特定の廟か特定の神のために行われる『○会』（例、大王会、夫人会等）或いは、貿易の内容により、名付けられた『○会』（例、驢馬会、皮襖会、農器会）、或いは特定の歴史的原因のために『○会』と呼ばれる（例、天津之皇会）のは廟会である」と説明した。さらに、「一部の地方では、『神集』という言葉があり、廟市の意味に近い。一部の地方では廟がないものの、（大道芸が集まる場所を）廟会という言葉も使われる¹³」と幅広く定義した。高¹⁴は廟会の定義を文化的角度から、「廟会とは廟市とも呼び、特定の時期に寺や廟の中及び近くに行われる集会活動である。大部分の廟会の形成と発展は宗教活動の影響と関係ある」と説明した。他に、高と孟¹⁵は「民間廟会は特別な社会形態であり、大衆の生活に重要な影響と役割を与えている。特に、大都市から遠く離れる村では、廟会とは人々の経済取引活動、文化交流活動の中心となる。人々は廟会の間に行われる各活動及び廟会の社会的機能を重視している。さらに、廟会の発展と変化には商品の生産、経営活動は緊密に関連している。廟会は民俗文化を合わせ集めた上に伝統的文化を伝播し、地方経済の発展と繁栄を促進した。廟会の基本的特徴は神秘性、団体性、継承と変化的統一性、娯楽性、地域性、季節性である」と総合的に説明した。本稿ではこれらの先行研究を踏まえて、筆者は現在の廟会を「廟会とはまた廟市とも呼び、毎年特定の時期に寺や廟を中心とした一定の空間に、宗教活動と経済取引活動及び文化交流活動が並行して行われていて、社会的機能を果たしている集会活動である」と定義したい。したがって、廟会の実態を考察する際、廟会を立体的に分析しなければならないと考える。

1-2 廟会の種類

各地の地方志を参考にして、廟の種類に対する概括的な分析はできるが、限界もあると筆者は考える。その原因は2つある。

1つには、地方志に載せられているのは主に、広い地域にわたって分布し、数の多い廟である。一方、地域における特色をもつ民間的な廟はあまり載せられていない。

2つには、地方志の内容により、仏教、道教を中心とする「寺観」、祖先祭祀と民間的崇拜を中心とする「祠廟」とに分けられ、違う項目に分類するのが一般であったが、現在の渭南市の農村部では殆ど区別されておらず、「廟」と呼ばれている。そのため、現在の「廟会」に対し、前述した概念と性格が変化している。

廟会を分類する必要がある一方、分類することを通して、人は廟会を新たに理解するうえ、廟会の際に現れる伝統的な供え物といい、舞踊といい、農村部の伝統的文化を重要視にしてきた都市部の人だけでなく、農村部から都市部に流出した若者たちに対して、郷土文化に新たに興味を持つようになることは今日の中国に対して重要な課題であると考えられる。従って、筆者は廟会を異なる角度から分類した。

調査村の村人と地方の民俗学者史氏の話（2014年3月27日に合陽県景城¹⁶）により、筆者は廟会を規模により分類すれば、「小廟会」、「中廟会」、「大廟会」、「特大廟会」に分けられると考える。

「小廟会」は大部分の村で行われ、一つの神霊を祀る。このような廟会に参加する人は主にその村の村民であり、周囲の村の人は少ない。「中廟会」とは、神霊が同時に複数祀られる場合の廟会である。このような廟会は北方で普遍的に見られる。「大廟会」は毎年2、3回の廟会活動が行われ、1か所に廟が1つではなく、複数の廟を持ち、廟会活動の内容は豊富で、参加する人はその村の人に限らず、周辺の村の人も多数参加する廟会である。「特大廟会」とは、廟の規模は大きいである上、廟会の期間は数日間続き、隣接の省まで影響を与える廟会である。

地域性による廟の分類は以下ようになる。

南北を問わず、各地に最も普遍に分布されるのが、「城隍廟」、「土地廟」、「関帝廟」、「東岳廟」、「真武廟」、「文昌廟」、「龍王廟」である。北方各地に

見られるのは、「三官廟」、「八臘廟」、「葉王廟」、「三義廟」、「馬神廟」、「火神廟」、「五道廟」、「三皇廟」、「牛王廟」、「劉河間廟」、「崔府君廟」などがある。南方各地では、「五顯廟」、「晏公廟」、「祠山廟」、「天妃宮」の分布は普遍的である。

その他、神話では体系が異なると主神も異なるため、民間的な廟を主神により、分類することもできる。

例えば、天地の神々を祀る廟では、祀られる神は主に架空のものであるため、地域性による制限は弱く、南方や北方の人に限らず全国からの人の共感を集めやすく、信仰する者は多い。それと共に、このような廟は仏教、道教の神を祀る場合が多いため、その影響は大きく、信仰する者も多い。その結果、長く残される可能性は高いといえる。例えば、「城隍廟」、「土地廟」、「三官廟」、「真武廟」、「玉帝廟」、「文昌廟」、「火神廟」などが挙げられる。

自然環境を管轄する神々が祀られる廟の種類は多い。このような廟の存在の原因は最初、人間が山、川など自然環境の力に対し畏れる感情の表現にあると考えられる。現在、このような廟に祀られる神々は自然環境のほか、人間の生命、財産、進路、病気、災害、婚姻、生育なども管轄するように変化してきた。例えば、「東岳廟」、「山神廟」、「河神廟」、「海神廟」などがある。

人間を神霊とみなし、「人神」を祀る廟も多くあり、筆者はそれが大体2種類に分けられると考える。その1種類は、地方神や古代から神とみなされる人を祀る廟である。「関羽廟」、「門神廟」等はその種類の廟である。2は、記念堂のような、人を記念するための廟である。

鬼神、仙人を祀る民間廟は「天仙廟」、「八仙廟」、「聖母廟」、「七聖廟」、「聖姥廟」などがある。

それに、動物神を祀る廟は「龍王廟」、「馬神廟」、「白馬廟」、「龍虎廟」、「蛇王廟」、「鵲王廟」などがあり、このような廟の起源は複雑である。虚構の動物が一地方の平安を守ったため、その地方の人はその動物を神霊とみなし、供えるようになったことと、人がある動物への恐ろしい心理が敬意になったことや、ある動物は人間に貢献を

し、人間はその動物に感謝・尊敬の意を表すために廟が建てられたことは多い。

その他、專業職業を管轄する神を祀る民間廟がある。例えば、「鲁班廟」(大工を管轄する神の廟)、「獄神廟」(監獄内の事務を管轄する神の廟)、「驢馬廟」(馬匹を管轄する神の廟)等である。

以上の主神による分類の中の神々、主神による分類と動物神、及び他の神々は相互に重なる部分がある一方、不完全な分類でもある。その他、目的により、厄払いをするための廟、子授けのための廟、功名と富貴を求めるための廟等の分類方法もある。しかし、実際に多くの地方では、廟は単一の機能を持つのではなく、総合的な役割を果たしていることが多い。

1-3 陝西省の廟会

陝西省は歴史が長く、民間文化の項目が豊富な地方であり、中華文明の発祥地と言われている。しかし、廟会をめぐる研究は少なく、特に陝西省関中地方の廟会についての研究はほとんどなかった。

陝西省の民間では現在でも「廟市」を「廟会」とも呼ぶが、『易経』には「日中為市¹⁷⁾」という言葉が見え、日中に貿易活動を行い始めるという意味である。元々は古代の物々交換を指すが、辺鄙な地に行われる商業活動を指すようになってきた。さらに、この言い方は黄帝時期にすでにあると記載されていたが、廟市と廟会の概念は全く混同できず、「廟市」より「廟会」が指している内容は広いと考えられる。唐の時代の「坊市制度」は国家が町の住民を管轄する制度であり、国家の経済活動を管轄する方式であった。そのうち、「坊」は住民が生活している地区で、「市」は取引をする地区である。唐の前期の都・長安(現陝西省西安)では、大規模な商品の取引及び、官民の間の物資の交流は主に「市」で行われていた。したがって、中国では現在でも取引や貿易を行う場所が常に「市」と呼ばれている。「市」の機能が備わるようになり、「廟市」という言い方も現れ、「廟市」の最初の形態も祭祀活動の中から生まれた。

それに、行商人や商売人は祭祀活動の間のビジネスチャンスを掴み、廟の周囲で露店を出したりして、蠟燭、油、食品、日用品、さらに農作物、農具、家畜等を売ようになってきた。このように、祭祀活動は大勢の人が集まり、集会という特性を持っている。そのため、民間では取引や貿易を行う場所「廟市」という言葉を集会の特性を含む言葉である「廟会」に替えて使う人は増えてきて、「廟市」と「廟会」の言い方は区別されないことが普遍的になっていった。

現在、関中地方の民間でも、廟会活動に参加しに行くことを「上廟市」¹⁸⁾、「逛会」¹⁹⁾或は「跟会」²⁰⁾と言う。(以下、すべて「廟会」という言い方に統一する。)

調査地の合陽県は関中平原の東北部にあたり、渭南市に属し、現在は鎮が12、郷が4つを管轄し、古くから文化の蓄積は厚い。合陽県は『詩経』²¹⁾・関雎(かんしゅ)が生まれた地方だという説もある²²⁾。合陽県において、儒教、仏教、道教が共存しているため、廟の数は多く、毎年、廟を中心に廟会が行われてきた。さらに、廟会の有無、規模、内容は歴史的原因、自然状況、村の経済状況、文化制度の変化、文化活動の盛衰により異なるが、現存の廟会に関する記録は少ないのが現状である。

筆者は聞き取り調査と参与観察により、現在、合陽県に行われ、かつ一定的な規模を持つ廟会を表1にまとめた。

筆者は2014年2月15日から4月3日の間、そのうちの5地点に実地調査を行った。それぞれは、1) 正月28日の坊鎮福德村・土地廟会、2) 2月5日の坊鎮坤龍村・華佗廟会、3) 同家庄鎮南長益村・葉王孫思邈廟会、4) 2月8日の坊鎮和陽村廟会、5) 3月3日の王村鎮南王村・玄武廟会である。

本稿は以上の5つの廟会を実例とし、現在、合陽県廟会が行われるプロセス、廟会の実態及び、村民の信仰を説明したい。その上、合陽県廟会の種類を初歩的に概括し、廟会の全体図を描きたい。とりわけ、陝西省の農村部において、一年の村の行事、及び村民の通過儀礼と最も関連している新

粉細工は合陽県の廟会の際にも利用されている。特に、合陽県の廟会では、この新粉細工は不可欠のものとされている。そこで、本稿は合陽県の廟会の際に使用された新粉細工の種類、特徴及び用途を分析し、廟会の中の新粉細工は廟会に対し、どのような役割をもたらしめているのかを検討したい。

2. 合陽県廟会の実例

2-1-1 坊鎮福德村——土地廟会

坊鎮福德村の村人は最も土地神を尊敬している。当地の村人は土地神を「中央主」と言い、村人の民間信仰にかかわる全ての神の中で、最も重要な神である。毎年、年輩者は自発的に廟会組合(「廟会組織小組」)を結成し、廟会が開催される際、主催場の規律違反の検査や司会等の役を務める。一般に、廟会組合の構成員や人数は決まりがないため、毎年、構成員の人数と役目は違う。ただし、務める人はほとんど年輩者や経験の持ち主である。

福德村の土地廟会は2日間続くのが一般的である。正月27日の夕方から、村民は廟会の準備をし

表1

開催日(農耕暦)	場所/名称
正月15日	黒池鎮一三後廟会
正月28日	坊鎮福德村—土地廟会
2月5日	坊鎮坤龍村—華佗廟会 同家庄鎮南長益村—葉王孫思邈廟会
2月8日	坊鎮和陽村廟会
2月19日	新池鎮宋家庄廟会
3月3日	王村鎮南王村—玄武廟会
3月18日	知堡鄉臨皋村—後土娘娘廟会
4月1日	海龍鎮—龍王廟会 黒池鎮南社—祖師廟会
6月15日	甘井鎮西牛庄—武帝廟廟会
6月+19日	新池鎮新家庄—後土娘娘廟会
7月1日、15日	王村鎮井溢村—武帝廟会
1月11日	坊鎮靈泉村—福山廟会
7月25日	洽川鎮—天柱山廟会

出所) 筆者作成

始める。廟会組合の構成員は廟の前に集合し、翌日のために土地神の像、位牌、及び錦の旗、蠟燭、果物などの供え物をテーブルの上に置く。28日の零時から、土地神の像の前に線香を立てること（上香）はできるようになり、廟会が始まる。村民は自発的に新粉細工を土地神の像の前に置き、廟会組合の構成員からもらった線香を両手で持ち、心の中に願望を唱えながら、3回額づく。

28日の朝の9時頃から、廟会は正式に開始する。廟の前、村人は買ってきた爆竹に火をつけ、鳴らし終わってから、廟に入り、線香を立てる。廟会組合の構成員は場面を賑わすため、廟の外で舞踊をしたり、太鼓を叩く。地方の特色のある食品を売る人が道の両側に店を並べ、商売をする。道は臨時的な露天市場になったといえる。同時に、廟の近くにある広場に、地方劇の劇団は準備を整え、村人は椅子を広場まで持ち込み、地方劇の鑑賞を準備する。廟の中、廟会組合の構成員は土地神の像の両側に座り、雑談をしながら線香を立てに来る人に、願望をかけるために必要な指導をする。それに、願望をかける人の中、新粉細工を持ってきた人は先に新粉細工を供え、土地神の像が置かれたテーブルの下にある箱（功德箱²³）に、誠意を表すための金（香火錢²⁴）を入れたら、線香をもらい、願望をかけながら、像に3回額づく。新粉細工を持っていない人は直接線香をもらい、願望をかけ、像に3回額づく。ただし、金を出すかどうかは決まりがなく、個人の経済能力による。

12時頃から、合陽県提線木偶劇団により地方劇「鴛鴦楼」が上演される。調査当時では、去年の廟会に、D氏は息子に子供が恵まれるように、土地神に願望をかけた。翌年の2月、D氏に孫娘が生まれたので、お礼参りをするため、個人で金を出して、地方劇を一幕増やしてもらった。

地方劇は午後の5時頃まで演じられ、その後、廟会組合の構成員及び村人は土地神に供えた果物や新粉細工の一部を分け合い、残りの物はそのまま供える。

2-1-2 坊鎮坤龍村—華佗廟会

坤龍村では、華佗²⁵を祭祀するしきたりがあるが、華佗廟と呼ばれる建物は粗末で、廟内に華佗の泥象とテーブル一つしかなかった。廟の近くにある部屋に住んでいる廟の衛生管理者雷氏（1936年生まれ、男性）の話では、祭祀のしきたりに関する文字の記載がないため、雷氏を含めて村人は誰もその歴史的起源を言えなかった。しかし、村人は華佗を神と敬い、華佗神と呼び、華佗廟は村人の身の上の占いと病気の治療方を提供するという機能を担っているといわれる。

普段、雷氏のほか、村人も不定期に自発的に華佗廟を管理をしている。廟内ではおみくじの道具が華佗の泥像の前にあるテーブルに置かれ、祈願をしに来る村人はくじ引きをしてから、その解釈を担当する人に聞く。占いの解釈と治療方が記載されているものは一般的なノート帳であり、それは代々伝わってきたものと解釈を担当している人に言われ、このノートに書いてあるものは誰が書いたのか、いつから伝わってきたのかのようなことは一切知らないようである。ただし、村人の中に、何人かがひどい病気になり、西安の病院で治療を受けても、治らなかったが、華佗廟でもらった治療方の通りに漢方薬を飲んだら治った例が何件もあったといわれた。しかし、この廟会には華佗神のために行う奉納芝居は掛かっていなかった。さらに、廟会の当日に、廟内には四人の村人しかおらず、ほかにお参りに来る村人は見られなかった。その理由は当日、天候が悪い上、廟の規模も小さいからであると言われた。

2-1-3 同家庄鎮南長益村—葉王孫思邈廟会

孫思邈（そんしばく）は唐の時代の医者、道士であり、世界史上有名な医学者、薬物学者である。中国では、孫思邈は「葉王」とも称され、多くの中国人に「医神」と思われている。歴史では、孫は陝西省耀県の出身であるが、孫氏を祭る廟（「葉王廟」と呼ばれる）は耀県だけではなく、省内に何箇所もあり、南長益村にもある。その理由については、歴史上南長益村には広範囲の瘟疫²⁶が

起き、村民を救うため、孫氏は薬草を南長益村に持ってきて、村民は災難から救われたという伝説があるからであると村人が語っている。したがって、孫氏は村の恩人であると南長益村の人にみられ、孫氏に感謝するために薬王廟を建てたと村の廟会委員会会長王氏（1950年生まれ、男性）と地方の民俗学者史氏が語った。

陕西省では、孫思邈を祭るための祭祀活動が多く、ほとんど旧暦の2月2日27に行われるが、南長益村では、その祭祀が2月5日に行われている。村人によると、その原因は「以前、村の経済状況は非常に悪く、貧困な村と言われていた。他の地方と同じ日に祭祀活動をしていた時期、村民としては一年中に最も盛大で、賑やかな活動とされる廟会は誰も見に来なかった。したがって、自分の村をアピールするチャンスも失っていた。そのため、ある時期から（詳しくは説明できなかった）薬王廟会は2月5日になった」と語った。

南長益村の薬王廟は文化大革命時期に前庭が破壊され、2011年に再建された。その状況の上、貧困だった村は廟会が行われなくなった。生活状況が改善されてきた現在では、村をアピールするために2014年にまた復活した。さらに、2014年11月25日、中国住房と城郷建設部、文化部、文物局、財政部、国土資源部、農業部、国家旅行局が公布した「第三批中国伝統村落名録」には、同家庄鎮南長益村が登録された²⁸。2014年現地調査の当時、

薬王廟会の規模は以前より大きく、廟会に参加する人は村人だけではなく、周辺の村人と遠いところから来て商売をする人も多かった。

廟会の再開を祝うため、村は盛大なる儀式を行った。

まず、儀式の前夜、村の広場に映画が上映されていた。

翌2月5日の朝9時頃、村民委員会の構成員は廟の前に集まり、儀式が開幕した。特別に、委員会の幹部X氏は孫思邈を記念するためのスピーチをした。その後、廟の両側に、銅鑼と太鼓が叩かれ、爆竹が鳴らされ、儀式が開始した。まず、年長者計6名は廟の前へ移動し、孫氏の肖像画に向かい、蠟燭を点し、酒を土に撒いてから、線香に火をつけながら、お辞儀を3回した（写真1参照）。次は、家族円満の夫婦計3組が代表として、廟の前に三焼²⁹と十碗飯³⁰と呼ばれる料理及び新粉細工（写真2参照）を献上した。また、県の幹部の代表一名は孫氏の肖像画に向かい、酒を土に撒き、お辞儀を3回した。それから、村民委員会の代表計6名が造花を孫氏の肖像画の前に献上した。儀式の最後に、村の元書記官は廟の前で祭文を捧げた。その祭文には、廟会の復活宣言、孫子の治績の宣伝、南長益村の今後の発展計画が内容として盛り込まれていた。その後、元書記官は投票の結果に基づき、村の仲睦まじい家族計3組、長寿の老人計3人、優秀な嫁³¹計3人を表彰した。

写真1 南長益村の薬王廟会の儀式



出所：南長益村の薬王廟前（2014. 02. 05 筆者撮影）

写真2 南長益村の薬王廟会に用いられる新粉細工



出所：南長益村の薬王廟前（2014. 02. 05 筆者撮影）

写真3 南長益村の薬王廟会のパフォーマンス



出所：薬王廟に大通り（2014. 02. 05 筆者撮影）

11時頃から、村民代表計4組は廟の前から広場まで、銅鑼と太鼓を敲きながら、舞踊をした（写真3参照）。この間、村民は自由に廟内に入り、新粉細工、線香等の供え物を献上することができた。

午後1時頃から5時頃まで、村の広場に合陽県劇団が地方劇「周仁回府」を上演した。

6時頃から、広場で映画「太行山上」が上映された。

2-1-4 坊鎮和陽村廟会

和陽村の人口は約3千人であり、合陽県において規模の大きい村の1つである。文献資料³²及び地方民俗学者史氏の口述によると、1645年（順治2年）合陽県の代理県令である劉漢卿は侵入した敵と闘い、和陽村の村民を救い、自らの命を失ったことがある。さらに、当時、劉氏の死体は道に粘着し、移動されなかったが、年長者の1人は劉氏が村の守り神になったので、これから劉氏を祀るため、祠堂を建てるべきだと言い出したら、劉氏の体を動かすことができるようになった伝説が

ある。それにより、劉氏の祠堂は毎日、人が祀りに行くようになった。

昔、和陽村では一年に3つの大きな廟会があった。それぞれは、2月8日の「観音廟会」、正月17日の「馬王廟会」及び、7月15日の「関帝廟会」である。劉氏を祭る廟会はなかったが、年中行事や廟会のある時期に、村民は必ず劉氏の祠堂にも供えに行く。最初、村民は劉氏に対する崇拝と感謝の気持ちを表すために劉氏を祀ったといわれるが、村人は家庭円満、病気平癒、縁結び、出産安産など様々な願望を叶えるためにも劉氏の祠堂に祈願しに行くようになった。1958年に劉氏の祠堂は小学校に改築されたため、廟会もなくなったが、2001年の2月8日に、村民の要望に応じ、廟会が復活し、同時に、劉氏と観音を同じ日に祀るようにとのことである。

現在、和陽村廟会は「二八文化祭」（二八文化節）と呼ばれ、祭祀の活動は7日の昼の12時から9日の夜まで続く。活動の内容は坊鎮福德村の土地廟会とあまり変わりがなく、以下のようになる。

7日に、村民は舞踊と太鼓のパフォーマンスをしてから、地方劇が広場で上演される。

8日に、舞踊のパフォーマンスをしてから、優秀な村民を顕彰するための大会が開かれる。その後、地方劇が広場で上演される。

9日に、村民は歌や舞踊のパフォーマンスしてから、広場で地方劇が上演される。

この3日間、広場の周囲に店を並べ、臨時的な露天市場もある。

2-1-5 王村鎮南王村—玄武廟会

道教は中国本土で生まれた宗教である。合陽県において、道教文化の伝播は普遍であり、道教に関する廟会は少なくない。合陽県において、神のために行う祭祀が「神賽」或いは「賽」と呼ばれ、神のためではない祭祀を「会」と呼ばれるしきたりがある。そのうち、「会」は主に道教の神仙を祭るために行われる行事であるといわれる。

南王村の廟会は玄武廟青石³³殿で行われる。青石殿は万曆32年（1604年）³⁴に建てられ、陝西省

の唯一の青石で建造された物である。さらに、1993年に玄武廟青石殿が陝西省の省レベルの有形文化財（重点文物保護単位）、2006年に国家レベルの有形文化財（重点文物保護単位）であると定められた。

青石殿の中に祭られるのは玄武大帝³⁵であり、殿の外側の東、北、西の3面に老子の物語が彫刻されている。青石殿の下にある洞はそれぞれに、三清洞³⁶、雷神洞³⁷、薬王洞、玉皇洞³⁸、三官洞³⁹、三聖殿⁴⁰である。筆者の観察では、廟会当日に、参加する人は最初に青石殿を参拝し、下にあるそれぞれの神に参るのが一般的である。そして、村人は道教、仏教や民間信仰の神を問わず、できるだけ全部の神像の前に新粉細工を献上すれば願望が叶うと考えている。最も縁起の良いことであるといわれている。

玄武廟会が行われる場所は狭い所にあり、広場もないため、臨時的な露天市場はなく、その代わり、宗教を宣伝するチラシや本は無料で配布される。それに、参加する人はほとんど本村の人しかない。しかし、太鼓と舞踊のパフォーマンスはなくてはならない。村人は自発的に玄武廟の近くにある空いている場所ですることが多い。さらに、玄武廟会には映画の上映や地方劇の演出はなく、1日間しか続かない。

2-2 合陽県の廟会の種類及び特徴

本節は上述した廟会の実例をもとに、合陽県の廟会の種類を分析し、さらに廟会の特徴を考察していきたい。

2-2-1 調査村の廟会の種類

前節に述べた廟会の実例からみると、合陽県の廟会は年中行事のためにだけでなく、やはり村人の宗教信仰、及び民間信仰に関連するものが多い。

まず、規模からみると、合陽県の廟会は村の規模、経済力により相違する。前述したように、福德村の土地廟会、和陽村の廟会及び、南王村の玄武廟会は大廟会に属し、南長益村の薬王廟会は大

廟会に属す。一方、坤龍村の華佗廟会は大廟会に属すと言えるであろう。それに、廟会は必ずしも毎年、1回行うわけではなく、何年かに1回行う場合、及び1年に何回か行う場合がある。廟会を行うためには、村民が自発的に寄付金を集めくる。したがって、廟会の頻度は当年、村人と村の経済状況によると言える。

また、合陽県の廟会の属性からみると、動物神を祀る廟会は少なく、「天神」、「人神」、鬼神、仙人のような「民間神」のために行う廟会が多いことが分かった。その原因は関中地方において、豊かな自然環境及び、豊富な文化項目の影響を受けたためではないかと考えられる。一方、陝西省農村部の村において、薬王廟は多くあり、調査村にも薬王廟と華佗廟がある。薬王孫思邈の出身地は陝西省であるという説のほか、この地域では、疫病が流行し、村人が薬王信仰と華佗信仰に救いを求めた可能性もあるのではないかと考える。

さらに、調査村において、単一な人物や神を祭祀するために行われる廟会は少なく、複数の宗教と民間信仰、及び単一の宗教と民間信仰が相互的に影響し合い、現在の合陽県の廟会が形成されてきたと考える。

それに、廟会は時代の発展とともに、祭祀される対象、祭祀の内容、祭祀の形式も変化してきた。和陽村廟会のように、最初は違った場所に祀られていた神を1箇所に合祀し、同時に祀られ、廟会を開くことは普通に村民に受け入れられた。さらに、祀られる神の御利益が異なっていて、靈験があらたかであれば、村人は全般的に受け入れる傾向があると考えられる。

2-2-2 合陽県の廟会の特徴

合陽県において、村ごとの経済状況により、廟会を行う村は多く、村民にとって、廟会は一年中最も期待される盛大な行事であると考えられる。一方、村にとって、廟会は村民の生活内容を豊かにするイベントでもあるため、村の行政は廟会の推進を援助する傾向がある。例えば、調査村の南長益村の薬王廟は2010年に撮影し始めた中国の映

画『白鹿原』の取材地である上、2014年に公布した「第三批中国传统村落名録」への登録申請が認められるようにするため、村をアピールしなければならぬと南長益村の元党支部書記任氏（1962年生まれ、男性）が語った。そのためにも、薬王廟会は復活された。さらに、村委員会は村を新たに建設するために約25万円を援助したと任氏は言った⁴¹。

それによって、合陽県の廟会は伝統的な要素といえる臨時的な露天市場、地方劇の上演、舞踊と太鼓のパフォーマンスに限らず、映画の上映など、娯楽的要素を加えるケースもある。

しかし、合陽県において、廟会の際に供物とされる新粉細工は無くしてはならないものである。

例えば、福德村の土地廟会に用いられる新粉細工は主に油輪⁴²（YouLun）と神桃⁴³（ShenTao）と呼ばれる2種類のものがある。油輪の原料は小麦粉と黒砂糖であり、それを練り粉に作られた後、リングの形にされ、揚げられた甘い新粉細工である。油輪は揚げられたものなので、より長い期間で保存することが可能であり、冷たくなったものでも食べることができる。

関中地方において、油輪は白事⁴⁴や神を祭祀する際に使用されるのが一般的である。合陽県において、白事の際に使われる新粉細工は基本的に色を付けず、新粉細工本来の色を保つものが多い。これらは、蒸されたもの或いは揚げたものが用いられるのが特徴である。県内の各村のしきたりは多少違うが、主に2種類の新粉細工が使用される。1種類は花献天饅（HuaXianTianMo）であり、もう1つは油輪である。

花献天饅はまた献貼（XianTie）と呼ばれ、当地の方言で献碟（XianDie）といわれるのが普遍である。それは死者の一番親しい親戚が贈る新粉細工であり、普通は2個が贈られる。花献天饅の台座とみられる部分は直径が25センチの大きい白饅⁴⁵（BaiMo）で、その上に、真ん中を鶴の形にしたやや大きな新粉細工を乗せ、その周りにはより小さい新粉細工（花、鳥の形にしたものが多い）が木の棒によって突き立てられており、これは天

（の神）に死者の亡霊を受け入れるようという願いの象徴であるといわれる。

白事の際に使用される油輪は5セットであり、1つのセットでは、9つのリング状の油輪が重ねられた後になる。そのうち、下部の8個は横になる状態で重ねられ、上には1個の油輪が立っている状態に下の油輪に挿される。村人によれば、油輪がこのような形になる理由は死者の亡霊がよりうまく済度できるようにとの願いが入っているからだとのことである。

廟会の際に、神に祭祀するための油輪は祈願に来る村人が持ってきたものなので、そのセットの数は特定されていない。さらに、1セットの油輪の個数は9個と11個の2種類があり（写真4参照）、個数の多いほうを神に差し上げる村人はより誠意を持っていると思われ、掛けた願いが叶う可能性は大きいといわれる。

神に祭祀するための油輪は神の泥像の前にあるテーブルに置かれるのに対し、神桃は廟に入る時にドアに一番近い場所の真ん中にあるテーブルに置かれるのが普通である。

写真4 和陽村廟会の劉氏の泥像



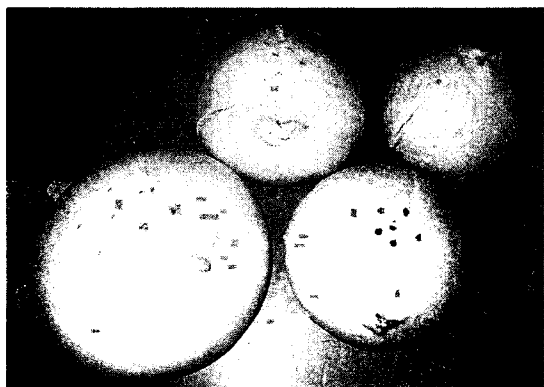
出所：和陽村の広場の東北方位に、劉氏の泥象が置いてある部屋（2014. 02. 08 筆者撮影）

神桃も同じく祈願をしに来る村人が神に差し上げる新粉細工であり、1セットは5つのシンプルな形にした白饅と一番上に飾られる「桃」という漢字の形にしたものから組み合わせられる。この場合、5つの白饅は必ず下に3個、上に2個の形式になる。

元来、福德村の土地廟会は土地神を祀るための祭りであったが、現在は子供を授かるために祈願をしに来る人が多いといわれる。

坤龍村の華佗廟会に使用される新粉細工は油輪と寿星餛飩 (ShouXingHunTun) (写真5参照) であり、福德村の廟会にあったような神桃のかわりに、赤い点をつけた白饅が献上され、それは当地の村人に神桃とも呼ばれる。

写真5 坤龍村の華佗廟会の新粉細工



出所：坤龍村の華佗廟会 (2014. 02. 05 筆者撮影)

写真6 和陽村廟会に用いられる新粉細工



出所：劉氏の泥象の前 (2014. 02. 09 筆者撮影)

南長益村の葉王廟会に用いられる新粉細工は油輪ではなく、より綺麗な糕が用いられた。制作者は村の委員会で選ばれ、最もよい新粉細工が作れる人といわれる。糕は合陽県において、新年の際、子供の誕生、年長者の誕生日を祝う場合に用いられるが、形がより綺麗で縁起のよいものとみられるので、葉王廟会の際に使われた。

葉王孫思邈に供える糕は4つあり、本体に付けられた装飾としたものは花と「妙」「術」「長」「存」の文字であり、意味は孫思邈が村人にもたらした幸福がとこしえに続くことである。さらに、祭祀が終わってから、供えられた新粉細工は村の委員会に持ち帰り、村の活動室に飾られたといわれた。

和陽村廟会の場合に供えられた新粉細工は献神饅 (XianShenMo) であり、一番下に3つの白饅と対になる2つの白饅が重ねられたものである (写真6参照)。和陽村の献神饅は白饅だけではなく、その上に派手な装飾も飾られ、子供の形のほか、花、鳥等もあった。

さらに、献神饅の個数に定めはなく、村民自ら持ってきたものであり、誠意を十分に持つ人は最もよくできているものを持って、供えに来るといわれる。

和陽村は大きな村であり、村の中に小学校がある。和陽村での調査により、簡単な新粉細工は見られなかった。その原因は、村民は比較的文化活動を重視し、廟会の際に用いられる新粉細工はより綺麗な装飾が飾られるものしか出さないことにあると考える。

南王村の場合では、青石殿の中に油輪 (7個の輪状新粉細工からなる) と餛飩が供えられた。それに、縁起のよいものとみられる赤い糸及び、人身安全、子供が健康であるようというお守りが塑像前の神棚に掛けられ、人は自ら持ち帰ることが可能である。青石殿以外に、ほとんどの供物は果物、菓子とシンプルな餛飩であった。さらに、一切の装飾のない白饅もあり、この現象は他の村に見られることはなかった。

3. おわりに

本稿では、筆者が実地調査を行った5件の廟会の実例に基づき、現在渭南市農村部における廟会の実態を明らかにした。

古代から、人間の神霊に対する崇拝の意識の発展は廟の概念の確立を推進した。後漢時代から明清時代まで、宗教活動と娯楽活動、文化活動、経済活動の結合により、長い期間を経て、廟市と廟会の言い方が現れ、廟会の形成は成熟した。廟会の中心も神霊を畏敬—崇拝—感謝—祀るための儀式から、神霊の祭祀、取引の進行、人と人の感情の交流のための社会活動になってきた。廟会についての研究の4つの発展段階からみれば、迷信活動と定められた伝統的な廟会活動は文化、政治的な規制があった時期にでも消滅せず、民間で存続されたことが分かった。

特に、農村部の人々にとって、廟会は単なる仏教、道教、儒教の宗教意識が具体的に表現される活動というだけではなく、天地の神々、自然環境を管轄する神々、動物神、人神、専門職業を管轄する神々、さらに鬼神、仙人など、自然宗教を信仰するために行われる活動の重要な方法と舞台である。また、厄払い、子授け、功名と富貴を求めるなどの目的により、廟会は単一な機能を持っているか、それぞれ多重の役割を果たしているからこそ、渭南市農村部の人々の精神を支える文化であり、生活には不可欠な部分である。

渭南市の合陽県は古代から文士は多く、文化の蓄積も厚い。そのため、合陽県において、文化活動は頻繁に行われ、新粉細工、操り人形、紙細工の発展は活発である。廟会の際に、参加者たちはそれぞれの伝統民芸を廟会の要素に転化し、伝統的な民芸と廟会を結びつけた。そのうえ、仏教、道教、儒教が共存している。従って、渭南市は宗教・民間信仰・伝統民芸が融合できた複合型の廟会文化である。

本稿に挙げた廟会の実例を踏まえて、現在合陽県の廟会は規模からみると、小廟会、中廟会、大廟会が行われている。廟会の属性は宗教に関わる

もののほか、民間神、動物神を祭祀するためのものもある。廟会の種類や様式等は様々あると考える。その原因はこの地方の人々は文化を最も重要視をして、この地域から生まれた伝統的文化、民間文学、操り人形や伝統劇「線腔」のような民間芸術などに誇りを持ちながら、保護してきたからではないかと考える。

また、この5件の廟会のプロセスをみれば、合陽県の廟会は新粉細工、地方劇、パフォーマンス、自由参拝という内容が不可欠である。このような形式の廟会は伝統的な廟会だと考える。加えて、規模が異なった臨時的な露天市場と映画の上映、もしくは薬王廟会のような行政が組織した村民の集団的参拝、村人の表彰、県と村の方針の宣伝という新しい内容を行う場合もある。現在、渭南市の廟会は伝統的な廟会とその他の項目が混合して、行われることがほとんどである。

2000年代から行政の援助等の原因に基づき、伝統的な工芸、民芸品、及び郷土文化の復興傾向が現れて以来、陝西省の農村部において、廟会及び廟会の重要な一部である新粉細工はより重要視されるようになってきた。新粉細工の贈答は人と人の日常的な交流の必要な手段となり、農村部及び都市部の人々の文化的、精神的、感情的な要望にも応えられるものになったと考えられる。

さらに、合陽県の人々は元来、新粉細工を重要視しているので、どの村でも廟会の際に新粉細工を強調する現象が見られる。例えば、筆者はこの5個所の行政の役人と村人にインタビューにした結果からみると、廟会の際に使用される新粉細工は当年度の村の経済状況が一定的に反映されている。そのうえ、新粉細工のような文化要素の活用は、行政にとって重要な業績評価指標であるとのことである。一方、新農村では、村人の生活が良くなった結果、麻雀やギャンブルをする人が多くなる傾向がみられる。そのため、行政は廟会の開催、および廟会の際に伝統民芸の活用、とくに新粉細工の活用を提唱している。同家庄鎮南長益村の孫思邈廟会では、村の委員会は献上品の新粉細工の製作者に奨励金として、新粉細工に使われる

原料に相当の費用を提供している。ほかに、南長益村の村人は自発的に甘井鎮の新粉細工の製作者が開催した製作体験授業を積極的に参加していると南長益村の製作者雷氏（1956年生まれ、女性）が言った（2014年2月5日）。

村人にとって、献上される新粉細工は自分の腕を全村の人に見せる方法である。製作者は廟会の場で自分の作品と他人の新粉細工との比較を通して、製作技の交流ができるといわれた。一方、廟会は製作者たちの競争意識が体现できる場でもある。廟会活動と廟会文化の発展は行政側の援助や推進と関わるが、村民たちも自らの積極的な姿勢を見せたのではないかと考える。

さらに、合陽県の廟会の実態から、農村部の人に対し、民間信仰の対象は単一なものではなく、多元な、総合的な形に変容してきたことが分かった。伝統的な儀礼及び年中行事も豊かな生活に伴い、新たな容貌で再構築されつつある。いずれにしても、時代と人間の要望に合わせたものであり、対立の立場に立っているものではなく、影響し合って、融合し合いながら、発展していくのである。また、いずれにしても、人のより良い生活に対する追求に応じられていると考えられる。

今後は、補足資料として、村の財政状況に関するデータを収集し、合陽県の廟会にだけでなく、陝西省において、廟会の変容及び、廟会と新粉細工の関係について、研究を進めて行きたい。それに基づき、博士論文を整えたいと考える。

【注】

- 1 顧頡剛『妙峰山』（民俗学会叢書之十八1928.09）pp.1007-1009, 1020-1065
- 2 張天虹「従市到場—唐代長安廟会的興起与坊市制度的破壊」『首都師範大学学報・社会科学版』2010 第6期, pp.30-31
- 3 劉鉄梁「廟会類型与民俗宗教的实践模式—以安国薬王廟为例」『民間文化論壇』2005.06 pp.12-14
- 4 王作良「簡論廟会与中国農耕文明の關係」『大学

- 学報』青海師範2010年第32卷第4期7月, p.16
- 5 高占祥「論廟会文化」（上海文芸出版社1995.05）
- 6 張世瑜「明清時期中国民間寺廟文化初識」1990年第4期, pp.45-52
- 7 黃帝：古代伝説上の帝王（紀元前2717年—紀元前2599年）で、「三皇」の一である。
- 8 後漢時代：前25年—前220年。
- 9 春秋戦国時代：前770年—前221年の特定の歴史時期であり、「東周」ともいう。
- 10 「俗語一定日期，假廟宇為貿易市場，賈販糜集，謂之廟会」『辞海』（上海書局出版1936）
- 11 「廟会亦称“廟市”，中国的集市形式之一。唐代已經存在，在寺廟規定日期舉行。一般設在寺廟内或其附近，故称“廟会”。」『辞海』（上海書局出版1962）
- 12 趙世瑜「明清时期华北廟会研究」『歴史研究』1992, p.118
- 13 例えば、北京の「天橋」も廟会と総称するのが一般である。
- 14 高占祥「民俗民風的縮影」高占祥主編『論廟会文化』（北京文化藝術出版社1992）pp.1-2
- 15 高有鵬、孟芳「中原民間廟会文化簡論」『民俗研究』1996（2）
- 16 県城——県政府所在地を指す。
- 17 日中為市：「日中為市，致天下之民，聚天下之貨，交易而退，各得其所」——『易經・繫辭下』。
- 18 上廟市：陝西省方言の言い方。
- 19 逛市：閩中地方の言い方。
- 20 跟会：閩中地方の言い方。
- 21 詩經：中国最古の詩篇である。儒教の基本經典・五經或いは十三經の一。閩雎：詩經の国風の周南の最初の詩、男女の恋を詠った詩である。最も有名な名句は：「閩閩雎鳩，在河之洲 窈窕淑女，君子好逑」（「閩閩たる雎鳩は 河の洲にあり 窈窕たる淑女は 君子の好き迷なり」）であり，意味は仲睦まじく鳴きあうミサゴの夫婦が川の中ほどにたわむれている。奥ゆかしく麗しい女性は君子の妻にふさわしい。
- 22 史耀増「天工巧奪の合陽麵花芸術」『民間・合陽麵花』002期（民間雜誌社2011）pp.8-9
- 23 党鳴等『合陽県誌（1991-2005）』（陝西人民出版社2014）pp.186-188
- 24 木材か金属で作られた箱，村人は功德を積むため，中にお金を入れる。
- 24 「功德箱」に入れられた金は「香火錢」と呼ばれ，

意味は線香を買う分の金である。

- 25 華佗は中国の後漢末期の薬学、医学の領域に才能を持つ伝説的な医師である。
- 26 急性の伝染性感染症の総称である。
- 27 廟会が2月2日に行われる原因を地方の民俗学者及び10人の村人に聞いたが、分かる人はいなかった。2月2日に南長益村と近い村は古会を行うので、その日を避けて、他の村の人の注目を集めるために、この日に定めたと言われている。
- 28 陝西三秦網 <http://www.sanqin.com/2014/1208/67104.shtml> (2014.12.08) 及び、中国人民政府・政府門戸網 <http://www.heyang.gov.cn/info/1019/25599.htm> (2014.12.23) を参考
- 29 魚、鶏肉、豚肉で作った料理であり、行事の際にしか出せないと言われる。
- 30 当地において、貴賓を招待する際に出す十種類の料理である。
- 31 ここでは息子の妻を指している。
- 32 史耀増「合陽県和陽村信仰調査」『合陽民間俗語里的民俗』（天馬出版有限公司 2013.10.15）pp.441-451を参考。この論文は2012年9月内モンゴルで中国民俗学会2012年年会に発表され、2012年5月『宝鶏文理学院院報・社会科学版』第5期に掲載された。
- 33 建築や碑に用いる黒い石である
- 34 党鳴等『合陽県誌(1991-2005)』（陝西人民出版社、2014）p.197を参考
- 35 中国古代の神話の中に、北方を代表する神である。
- 36 「玉清」「上清」「太清」であり、道教の中に最も尊敬される神である。
- 37 道教では、雷の神は悪と罪を処罰する神だと思われる。
- 38 道教の最高神であり、天帝と呼ばれる。
- 39 それぞれは、中天官、右地官、左水官である。中天官は幸福を賜う神であり、右地官は罪を許す神であり、左水官は厄を除き去る神である。
- 40 仏教の神である。
- 41 「合陽県南長益村打造郷土文明愿景図」中国人民政府門戸 <http://www.heyang.gov.cn/info/1019/25599.htm> (2014.12.23) という文章に、「村民は自

発的に薬王廟の修繕費を14万元出資した。村委員会は銅鑼と太鼓、舞踊のチームを組織するために8万元を援助し、30人の薬王文化組委員会を成立するために16万元を援助した」という内容で検証できる。

- 42 当地の村人は「油輪」を「YouLin」と言い、「^{リン}輪輪」(LinLin)と略称する。
- 43 当地の村人は「神桃」を「桃桃」と略称する場合が多い。形は桃に見えると村人が強調したが、筆者はそれが曲がっている蛇に似ていると考える。
- 44 中国人は「白事」、即ち天寿を全うすることと理解し、「喜葬」とも呼ぶ。
- 45 色や装飾のない新粉細工である。

【参考文献】

- 党鳴等『合陽県誌(1991-2005)』陝西人民出版社 2014
- 劉鉄梁 李向振「2011年度国家主導の民俗文化保護与發展事業」『中国民俗文化發展報告』北京大学出版社2013
- 劉鉄梁「廟会類型与民俗宗教的实践模式——以安国薬王廟為例」『民間文化論壇』2005.06
- 顧頴剛『妙峰山』民俗学会叢書之十八1928.09
- 高占祥「論廟会文化」上海文芸出版社1995.05
- 史耀増「合陽県和陽村信仰調査」『合陽民間俗語里的民俗』天馬出版有限公司2013.10.15
- 趙世瑜「明清时期华北廟会研究」『歴史研究』1992
- 趙世瑜「中国伝統廟会中的狂欢精神」『中国社会科学』1996年第1期
- 趙世瑜「明清時期中国民間寺廟文化初識」『北京師範大学学報』1990第4期
- 王猛「華北地区廟会研究綜述」『高校社科動態』2009年第6期
- 王作良「簡論廟会与中国農耕文明的關係」青海師範『大学学報』2010年第32卷第4期7月
- 張天虹「從市到場——唐代長安廟会的興起与坊市制度的破壞」『首都師範大学学報・社会科学版』2010年第6期